

---

# ファンタシースターポータル2 偽神達の転生（日常編続き）

コーラ大好き

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ファンタシースターポータブル2 偽神達の転生（日常編続き）

### 【Nコード】

N5272Y

### 【作者名】

コーラ大好き

### 【あらすじ】

コーラ大好きシリーズ。日常編続き。 “狂神の信念” から1年後…… 新たな事件を予感しながらも、主人公ファントムはいつもの日常を過ごしていた。 しかし“制裁者”と呼ばれる存在と遭遇し、心に重くのし掛かる戦いに身を投じていく……

0章：裏↪転生↪（前書き）

祝！！

第三部目！！

でも3作品目から変に感じる物です。

（個人の意見ダヨ）

オリキャラが4人程出てくるんですが、プロフィールは次話で書かせてください。

## 0章：裏く転生く

どこかの建物

ある一室に、ビーストの男がイスに縛られている。  
部屋自体は小綺麗だ。

扉がノックされ、ビーストの男が反応する。

カザ

「チヨリース！

元気ですか？

ゴールドさん」

ゴ

「いつまで私を監禁するつもりだ……

何人かのヒトに会わせ、それっきり来なかったが……

何しに来た？」

カザ

「そろそろ良い頃合いなんすよ！

ちよっと待って下さいよ」

部屋の外から大きな袋と、重そうなアタッシユケースを持ってきた。

ゴ

「何だ？」

カザ

「ゴールドさんの好きな物っす。  
それい！」

袋の中身を全てぶちまけた。  
中身は宝石、金塊、骨董系のメダルと  
高価な物ばかりだ。

ゴ

「!!!!!!」

カザ

「こっちも！」

アタツシユケースを開け、中身の札束を掴んだ。  
それをばらまき、宙に金が舞った……

ゴー

「か……金……金！」

カザ

「そうです！ アンタが好きな金ですよ！」

ゴー

「うう、オオオオ……」

ゴールドはつめき声をあげる……

カザ

「アンタは

ゴールド・シルバシノ

思い出して下さい！

俺達の指命を……」

ゴー

「グアア……ウツ……

アアアアア……」

叫び声が止むと、首をダランと落とした。

カザ

「大丈夫ですか？」

ゴ

「……………」

大丈夫だカザリ。

さっさと拘束を解け」

カザ

「ハイハイ」

拘束具を外し、ゴールドを自由にする。

ゴ

「ふむ、この拘束方法と器具……

アンナはすでに？」

カザ

「来てるっすよ。

まだ人数は足りないって感じですけど……

……あ、掃除面倒なんでゴールドさんの部屋は「こじっすよ」

ゴ―

「構わん。

金に埋もれて寝るのは良いものだ」

ゴールドは近くにあったお札をポケットに仕舞うと、カザリと一緒に部屋を出ていった。

建物内 会議室

楕円形の大きなテーブルに、12脚のイス。

イスに座っているのは3人……

カザリとゴールドで5人になる。

イスに座り、メンバーを確認する。



ゴ

「まだ5人か……」

アンナ・ザ・ブラッド

シエリー・エクスタシー

ロドリゴ・ゼル大佐

カザリ・イリオン

そして私……

……7人も足りないな」

カザ

「今探してる最中っす」

アンナは手錠をクルクル回している。

シエリーはエロ本を読んでいる。

ロドリゴはヤスミノコフ0002を手入れしている。

ゴ

「そうは見えないが？」

カザ

「実際面倒なんす。

でも“虚実”以外の居場所は判明してますよ」

ゴ

「どこだ？」

カザ

「王権」がガーディアンズの刑務所。

“完全”“愛”“死”

“運命”がリトルウイング。

“食”は1年前の事件のせいで体が存在しません」

ゴ

「食”はOFMになったんだっただな。

“虚実”の力ならどうにかなるかもしれないが……

……

シヌは私達の邪魔しからないな」

シヌという言葉に強く反応する4人。

ゴ

「地獄で復讐出来るかと思ったが……

……フン、いつか果たす時が来るだろう」

カザ

「そつつすね……

……

さて、最初は“王権”から連れ戻しましょう。

ニューデイズのガーディアンズ刑務所です。

……

始めましょう……

制裁の時です」

さっきまでやる気の無かった3人が目の色を変え、武器を手にとって部屋をあとにした。

彼らは転生した……

下らないエゴの為に……

少なくとも……

彼らが行う事は、神がする事ではない……

そのような事はヒトしかしないからだ……  
つまり彼らは偽神……

偽神達は転生した。

0章：裏く転生く（後書き）

最後の何なんだ？

小説内に出てきた“ ”などは、  
制裁者の信条みたいなイメージです。  
違う奴もいるけど。

く拒絶、金、拷問、

欲情、戦争、(前書き)

緊張感無い書き方だな

↳ 拒絶、金、拷問、

欲情、戦争↳

カザリ・イリオン

Lv?

性別・男性

年齢・18歳

種族・ヒューマン

身長・175cm

体重・61kg

タイプ・“拒絶”

髪・チャライ 茶（染色）

服装・日によって違うが

チャライ

所属・twelve punisher

何から何までチャライ男性。

ファントムの前では紳士になる。

半年前まで高校に通っていた青年。

しかし行方不明になる。

行方不明になった数日後……

ローグスのビーストの男性と銀行強盗を働く。

ビーストの男性を裏切り、屋上に居るところをルシフェルに見つかる。

（故意）

意味深な言葉を残した後、奪った金品を持ち去った。

因みに、裏切られたビーストはガーディアンズの留置場に居たが、死亡している……  
殺したのはカザリ。

ゴールド・シルバシノ  
LV?

性別・男性

年齢・45歳

種族・ビースト

身長・179cm

体重・70kg

タイプ・“金”

髪・丸刈り(6mm)、黒

服装・スーツをだらしなく着ている

所属・twelve punisher

喋り方と雰囲気は大人しいが、金や高価な物を見ると目の色が変わる。

モトウブの大富豪で、表だった仕事から裏の仕事にも精通している。



ファントムに対して、緩く接する。

アンナ・ザ・ブラッド  
LV?

性別・女性  
年齢・27歳  
種族・ニューマン  
身長・174cm  
体重・58kg  
タイプ・“拷問”  
髪・セミロング、赤  
服装・ルナプロフェシー  
黒  
所属・twelve punisher

超ドSなニューマンの女性。  
喋り方も相手を見下した感じ。

カザリと同じで、ファントムに対して忠誠の雰囲気がある。

ザ・ブラッドは  
コードネーム。

フルネームを知るヒトは制裁者だけだが、他言無用らしい。

グラール教団の裏組織の一員で、異端者や破戒した者を拷問する。  
(カレンやルツは知らない)

普段から鞭とボウガンを携行している。

シエリー・エクスタシー  
LV?

性別・女性

年齢・製造から14年

種族・キャスト

身長・140cm

体重・28kg

タイプ・“欲情”

髪・ツインテール、橙

服装・セーラー服

所属・twelve punisher

性欲求に物凄く興味があるキャストの女の子。

快楽を知る為にボディを改造し、性行為が出来る。

元は記憶機能をヒトに近づけたタイプのキャストで、学校に通っていた。

シェリーはファントムに忠誠と言っよりかは、男性として見ている。

基本的にエロ本、官能小説を読んでいる。

ロドリゴ・ゼル

LV?

性別・男性

年齢・75歳

種族・デューマン

身長・190cm

体重・87kg

タイプ・“戦争”

髪・目立つオールバック

白髪

服装・緑の軍服

所属・twelve punisher

元軍人のデューマンの老人。

最終階級は大佐。

話し方は「儂」や「お主」と言っ。

数週間前まで隠居生活を送っていたが、  
t w e l v e p u n i s h e r の制裁者になっている。

戦闘狂な一面があり、70代とは思えない動きをする。

ファントムに対して嫌悪感があるが、どっぴうわけか従っている。

“ 12人の制裁者”

キリスト教における地獄の長……  
墮天使ルシフェルが構成した12人の男女。  
ファントム、エミリア、ナギサ、シズルも制裁者だが、そのような  
自覚は無い。

それぞれに

“ 王権” “ 運命” “ 食”

“ 金” “ 拒絶” “ 完全”

“ 愛” “ 死” “ 欲情”

“ 戦争” “ 拷問” “ 虚実”

と言つ意味がある。

構成理由は神を倒す為。

シヌは全員の正体を知っている。

神は、ミレイ・ミクナと協力して制裁者を抹殺しろと命令している。

く拒絶、金、拷問、

欲情、戦争く（後書き）

実はキリスト教の

七つの大罪にしようかと思ったのですが……

キリスト教ばかり入れるのは変なので、独自の物に……

## 0章：表　く偽神の力く（前書き）

最初はファントム目線ですが、  
途中から第三者目線です。

## 0章：表　く偽神の力く

シヌが引き起こした事件から1年経った……

半年前からあのカザリというチャラ男とは、慰安旅行以来会ってはいない。

戯言を言いに来た……？

そう言ってしまうえばそう思いたい。

これ以上事件はゴメンだ……

クラッド6

リトルウィング

居住区　ファントム自室

正午

俺は部屋で、昼食の自作クリームスパゲティを食べていた。  
マリ、エミリア、ナギサも居る。



エミリアとナギサは俺に対して相変わらずだが……  
半年前からマリの態度が少し変わった……  
具体的に言うと、干渉が激しくなったのだ。  
これまでは、少し干渉したとしても本音を聞こうとする事は無かつた。

本音など読心術を使えばわかりそうだが……  
現在、出来るだけ口から言わせようとする。

聞く事は決まって……

カザリとロストの事だ……

いつの間にか心を読まれていたらしい。

「アタシを除け者にするな！」

「頼れ！ 1人で背負うな！」

わかってる……

除け者にするつもりはないし、頼りたい……

……  
だが……

危険に晒したくはない……

勿論マリだけではない、仲間もそうだし、他人もそうだ。

考え事が最後になると、毎回マりに言われる事がある……

マリ

「自己犠牲は許さないよ」

エミリアとナギサの前で初めて言った。

マリの言葉にキョトンとする2人。

エミ

「どっしたの？」

ナギ

「ファントムの事か？」

マリ

「何でもないよ

ファントムの料理美味しい！」

ファ

「……………ありがとう」

少し変わってしまったが、不快感があるわけではない。  
その内、元通りになるだろう……………

ニューデイズ  
ガーディアンズ設立  
ケイリヨン刑務所

地球で言う、中国の様な名前が多い地域の森に、この刑務所はある。

森を囲む都市の名前は

“都市リクヨ”

金持ちしか住まない都市。

しかし、犯罪発生率が高い。

何故なら違法カジノやヤクザの事務所、非公式な地下都市……

光あるところに闇、とはこの事だろう。

それを牽制、犯罪率低下を理由に刑務所を設立している。

ケイリヨン刑務所があるケイリヨンの森は、凶暴な原生物に入り組んだ道……

刑務所には特定の道でしか辿り着けず、外に出る場合もそうなる。

何も知らない受刑者が森を抜けようとしても……

原生物に跡形も無く食われる。

or

森に迷い、絶望後に自殺。

どちらかだろう。

異常な場所に置かれてるケイリヨン刑務所に入所するのは、言うまでもなく、凶悪な犯罪者。  
ほんの一握りだけが出所出来るが、大半は刑務所で人生の幕を閉じる。

そんな刑務所がある森の上空を、今では見かけないヘリが飛んでいる。

搭乗者は

Twelve punisherの5人だ。

ロドリゴが操縦している。

ロド

「狩りを楽しんでこいよ！

ガハハハハ！！」

アン

「馬鹿笑いするな

老いぼれ」

ゴー

「アンナ、金をやるからその喋り方止めろ」

シェリー

「刑務所って言ったら

AVの種類であるよね」

カザ

「自由人っすね」

確認しますが、目的は

“王権”の奪還。

狩りは邪魔する“ゴミ”だけっすよ。

.....

カザリ、いきまゝす！」

カザリは一番に飛び降りた。

アン

「酷いパクリだな

口を縫うぞ、チャラ茶髪」

次にアンナが飛び降りた。

シエリー

「“ゴミ” 駆除とS\*Xは同じ位たのしいってね」

シェリーも飛び降りる。

ゴ

「変わらないな……」

ロド

「変わらんさ。」

時代は変わったがの

ゴ

「そうだな大佐。」

……帰ったら小遣いやるよ、お爺大佐」

最後にゴールドも飛び降りた。

全員、パラシュートなど着けていなかった。

ロド

「だ〜れがお爺じゃ！

ガハハハハ！！」

へりを旋回させ、森の開けた場所に着陸した。

ケイリヨン刑務所  
入口前

4人はコンクリートの地面に着地したが、骨折はおろか外傷も無い。

カザ

「さつさと“王権”を連れ帰ろう。  
長居は無用です。」

……  
と、言いたいですが……」

4人の前に

黒いゴコウバオリを着て、キセルを吸い、自身と同じ名の剣を持つ  
男が立ち塞がった。

ルシ

「待ってたぞ。」

カザリ・イリオン」

キセルを吸い、煙を吐き出すルシフェル。

アン

「アンタの知り合いかい？」

カザ

「そうですよ。」

……ルシフェル……

それでわかるっすね？」

シエリー

「へえ」……

ファントムさんのお兄さんね？」

ゴー

「私達のファントムに兄弟などいない」

カザ

「そっつすね。」

ファントム様に兄弟はいない。」



……ここは僕ちゃんが止めます。  
アンタ達は“王権”を……」

アン

「指図するな チャラ男。  
不本意だが私も加わろう」

ゴー

「では私とシエリーで探そう。  
行くぞ」

シエリー

「アイアイさ」

ルシ

「まあ待てよ……!!」

セイバーを、後ろを通ろうとした2人へ振った。  
フォトンの衝撃刃が飛んでいき、回避行動をさせた。

衝撃刃は刑務所の壁に当たり、巨大な裂け目が出た。

ゴールドとシエリーはカザリ達の場所へ行く。

シエリー

「やってくれんじゃん」

ゴ

「墮メ野郎の名だけはあるな」

カザ

「名は転生に必要な要素ですもんネ」

墮メ野郎は人間じゃないけど、影響はあるみたいっすね」

アン

「どうでも良いけど……」

アンタ、中の奴らの心配は無しなんだね。

人間は同族を庇うんだろ？」

アンナは衝撃刃が作った裂け目を指差して言った。

ルシ

「さっき俺は……」

“待ってたぞ”

と、行ったぞ」

カザ

「既に避難済みですかい？」

ルシ

「そつだ……」

ガーディアンズと協力してお前を見つけたんだ。  
迎え討つ準備は出来ているし、もう1人の仲間も取り押さえられて  
るだろう」

ケイリヨンの森  
開けた土地

へりを囲む様に、ガーディアンズが取り囲む。  
中には、ルシフェルに協力する数名のローグスがいる。  
部隊長はバアルだ。

バア  
「船を降りて大人しく投降しろ！」

ロド

「ガキ共が……」

ここで危険なのは部隊長みたいなのとタイラーかの……」

ローグスはタイラー、ヴィヴィアン、リリース、ロスト、がいる。

ケイリヨン刑務所

カザ

「なめられてるな……」

僕ちゃん1人じゃ無理だけど、4人も相手取れないでしょ？」

ルシフェルはキセルを消し、ナノトランサーに仕舞った。

ルシ

「雑魚4匹……」  
簡単に釣り上げれる」

アン

「言っじゃん!!」  
白髪野郎!!!!」

クイーンヴィエラを、数十本一気に打ち出す。

ルシフェルは衝撃刃で全て落とす。

しかしアンナに後ろを取られ、  
刃鞭パラディーソを振られる。

そんな事をさせる前に、前を向いたままアンナを蹴った。  
壁に激突する。

アン

「ガハッ!」

ゴ

「頭に血が昇り過ぎだな。

……

しょうがない……

私が回復に向かう」

アン

「必要ない!!  
こんな屈辱……」

ファントム様に陵辱された以来だ!!」

ルシ

「ファントムはそんな悪い奴じゃない」

アン

「今のファントムじゃない!!」

何も知らない“ゴミ”が……

“鉄の処女”

アイアンメイデン!!」

ルシフェルの真後ろに魔方陣が現れる。

(ルシ)

!?!? 何だ!?!?

危険を察し、避けようとしたが……  
若干遅く、鉄の処女に飲み込まれた。

ガシャン!

扉が仕舞った音……  
冷たい鉄の音だ。

直後に聞こえる、  
ルシフェルの痛みを堪える声。

ルシ  
「グッ！ ウ…グア…！」

アン  
「もっと叫ぶかと思ったけど……  
大したもんだね」

カザ  
「アンナさん！  
力は抑えて下さいよ！」

アン  
「黙れ！ お前だって銀行強盗の協力者を“拒絶”  
の力で殺しただけだろ！」

カザ  
「チツ……」

ゴー

「喧嘩は止める。

ファントムが見たら、怒られるぞ」

アン

「……わかったよ」

カザ

「……悪かった」

シエリー

「じゃあ仲直り！

握手握手」

無理矢理握手させる。

ゴー

「よし、大佐のどこまで行く」

4人が歩き出すと……

バキバキ……

バリッ！！



鉄の処女を無理矢理壊し、出てくるルシフェル。  
痛々しい針の傷跡が見える。

キセルをくわえ、セレスティアルブレイズを構える。

シエリー

「アンナさんの“拷問”の力を……

……

鉄の処女……

まさに処女喪失……

ゴ

「下らない事を言つな。

これは大問題だ」

カザ

「ですね。

いくら墮メ野郎の名前を持つとしても……

所詮人間……

僕達の力を覆すなんて……」

アン

「ム力つくな……」

ルシフェルは微笑し、  
キセルをくわえながら煙をはいた。

ルシ

「言っただろ雑魚共……」

……釣り上げれる位簡単なんだよ。

お前らが何であること……雑魚なんだ」

アン

「腹立つねえアンタ……」

……

拷問は無しだ。

殺してやるよ」

ルシ

「せいぜい頑張れ……」

調教してやるよ！」

この日から……

制裁者達との戦いが始まった……

## 0章：表　く偽神の力く（後書き）

雪降って寒い……

ストーブ使っていないと指先がおかしくなって書けなくなる……

……

何の話！？

アンナ“拷問”

・鉄の処女

アイアンメイデン

・拷問具

高さ2m

女性を型どっており、前面には観音開きの扉が付いている。

中には大小様々な針が付いており、致命傷を避ける様に設計されている。

グラールには存在しない。

地球では、

中世のヨーロッパで作られた。

拷問具の中では最も有名だと言ってもいい。

しかし、資料や実物に似せたレプリカによると……

使われた経歴が少なく、復元した物のほとんどは致命傷に刺さる設計になっている。

実用されていたかは、

怪しいところだ。

1章：0 く使用者（前書き）

やっぱり、緊張感が無い書き方だな……

進歩しないと。

1章：0 使用者

ニューデイズ

ケイリヨン刑務所

入口の前に十字架が立てられてある。

それに磔にされている……

ルシフェル……

手と足に杭が刺さっている。  
まだ息はある。

アン

「ハア…ハア…ハア……

ざまあ見る……

“拷問”の私の力は……中々死ねないよ」

十字架はアンナ力で出現させたらしい。

アンナ以外の3人も息を切らし、傷だらけだった。

カザ

「思った通り……  
侮れないっすね」

カザリに至っては、腕を斬り落とされている。  
片方の腕で落ちた腕を持っている。

ゴ

「攻撃型の方ではない私とシェリーは……  
役立たずだったな」

シェリー

「“金”も“欲情”も興味を示さないもんね……」

カザ

「もう良い……  
大佐のところへ行こう」

全員歩き出した。

すると……



ブシャ!

杭から手と足を引き抜き、セイバーで斬りかかる。  
瞳孔は開きっぱなしだ。

セイバーはアンナの顔面を捉えた。  
顔に突き刺さる。

ルシ

「ハアア!!」

上に振り、鼻から脳天まで真っ二つになる。  
よろめきながら、後ろへ距離を取る。

カザ

「まだ動けるんですか?」

ゴ

「他の“ゴミ”とは違うようだ……」

シエリー

「使い回せる粗大ゴミ？」

3人が3人とも、アンナの事など話していない。

ルシ

「仲間の心配は？」

……冷たいな」

“4人”が笑う。

アン

「アハハ！」

ファントム様以外は信じていないけど、死にかけても心配しないのはわかる」

頭を割られながらも悠然と話す。

ルシ

「……………」

どうなってる……………」

アン

「そこまで話す必要は無いわ。

……………」

ここまで奮闘を称して、綺麗な死に方をさせてあげるわ。

“斬首台”ギロチン」

魔方陣からギロチンが出現した。

ルシフェルの首を抑える。

ルシ

「クソ……………」

アン

「拷問器具だけじゃないのよ。

It's showtime!!」

レバーを蹴って、

刃が振り下ろされた。

ケイリヨンの森  
開けた土地

草は血に濡れ、木はへし折れている。

その土地で立っていたのは、ロドリゴとタイラーとバルだった。  
しかしタイラーとバルは疲弊しきっている。

ロド

「なんじゃ……」

全然弱い」

タイ

「クッ……」

タイラーは手に力を込める。

バア

「ナノブラストはダメですよ。

使っても勝てないだろうし、貴方の体が持ちません」

タイ

「だが……」

ロド

「小僧、それは違っぞ」

バア

「何がだ？」

ロド

「兵士たるもの、死ぬと解っていても戦わなきゃならん。それが出来なければ兵士ではない」

バア

「まるで道具だな」

ロド

「戦争では道具じゃ。

戦場ではそれ以上の価値は作れん」

バア

「貴様……」

ロドリゴは  
コマンドブレザー  
を取り出した。

ロド

「お主らじゃ相手にならん。死ね」

巨大な刃が向けられ、射出された。

……ガキン！

光テクニック  
グランツによって弾かれた。

ロド

「なんじゃ!？」

タイ

「?」

バア

「誰が……」

ロドリゴの前に、フード付きの白いマントを羽織った人物が降り立った。

ケイリヨン 刑務所

ギロチンの刃は、  
ルシフェルの首を切り落とさなかった。

フード付きの黒いマントを羽織った人物が、ルシフェルの拘束を解

い救出したのだ。  
ギロチンの横にルシフェルを寝かす。

アン

「誰？ お前……ウツ！」

黒マントは、アンナの首を真つ黒な日本刀で斬った。

返り血を浴びる前に、カザリ達の場所へ蹴飛ばした。  
カザリがキャッチするが、腕が一本しかないので器用に足を使う。

ゴ

「傷を負い過ぎてアンナは動けないな」

シエリー

「それより……」

「アイツ誰？」

フードを被って顔はわからないが、体付きから男だろう。



ルシ

「…………誰だ？」

黒マント

「俺を忘れたか？」

あれだけ復讐しようとしたのに「

ルシフェルは声でわかった。

黒マントが誰なのかを。

それはカザリ達も例外ではなかった。

シエリー

「！！！！」

その声…………！！」

SUVウェポンの

ガトリングシステム

ラファールバースト

を呼び出し、発砲する。

しかし黒マントは、

漆黒のフォトンの壁を作り、銃弾を遮る。

ゴ

「丁度良い!!」

「やっとお前を殺せる」

後ろに回り、

エンドイフで斬りかかる。

それを避け、足で肘を逆に曲げた。

ゴ

「ガッ！」

頭から踵落としを食らわせ、地面にめり込ませた。

シェリーのガトリングが止む頃、漆黒のフォトンの壁を解いた。

カザ

「何故!？」

「何故アンタはグラールにいる!？」

黒マント

「神のお陰だ。」

「ちょっと前までは信じてなかったがな」

マントを脱ぎ捨て、姿を現した。

黒い服に黒いコート、

漆黒の髪に目立ちにくいオールバック。

カザ

「シヌ………!!」

ルシ

「……………」

シヌ

「フフフフ………」

「アハハハハハハ!!」

「遂に舞い戻った!!」

「人間は滅ぼせないが、

お前達を“また”を殺せる!!」

「それで墮メ野郎の邪魔をし、居なくなるなら………」

「こんなに嬉しい事は無いぞ!!!!」

(カザ)

分が悪過ぎる……！  
いくら僕達が死ななくても、粉々にされる……！！

カザ

「シエリーちゃん！  
アンナさんを！」

アンナをシエリーに託し、素早くゴールドを回収した。

シヌ

「せいぜい逃げろ。  
ゆっくりと追い詰めて  
殺してやる」

カザ

「ウゼエ……  
シエリーちゃん、大佐のところへ行こう」

シエリー

「……わかった」

ゴールドとアンナを背負い、森に消えていった。

シヌ

「……………」

立てるか？ ルシ……

差し出した手を振り払い、M19を向けた。

ルシ

「何故生きている？」

ファントムはお前を殺したと……

……………クツ……………」

銃を落とし、地面に倒れてしまった。

シヌ

「手と足に穴開いてるに……」

無理するのはファントムと同じだな」

シヌはルシフェルを背負った。

ケイリヨンの森  
開けた土地

ロドリゴの刃を的確に落とす白マント。

(ロド)  
これ程のテクニク……  
フォーヌの上級者でも  
中々いない……  
一体何者じゃ？

決着がつかないまま時間が過ぎていく。  
すると、カザリ達が走ってきた。

ロド

「……………!？」

どうしたんじゃない!？」

カザ

「話はあとつす。

へりを出して下さい!！」

ロド

「わ……わかった……………」

へりに乗り込み、エンジンを作動させた。

白マントは追撃せずに、へりを見送った。

バア

「君…………………凄いな……………」

女の子だろ?」

確かに体付きから女の子だとわかる。





ルシフェルを背負って、シヌが現れた。

ミレ

「みなさん危険な状態ですね……  
救援が来るまでは私が治療しましょう」

シヌ

「みんな面識が無いのに……  
星れ……じゃなくて……  
幻視の巫女様は慈悲深いですね」

ルシフェルを横たわらせる。  
他にも倒れているヒト達を、一ヶ所に並ばせた。

1章：0 く使用者く（後書き）

タイラーとミレイって……

面識無いですよね？

ユニバースを詳しく知らないので……

1章：1 く求めていたの

は仲間く(前書き)

後半が強引ですが、

カレンは聞き分けが良いんですよ……

……たぶん……



カザ

「無理しない方が良いつすよ。  
死ななくても、痛みはある程度感じるんですから」

アン

「わがっでるわよ」

シエリー

「それよりどうするの？  
アイツがいたら制裁は  
無理じゃない？」

ゴー

「フロントムか“虚実”……  
どっちかがいたら、どうにかなるかもな……」

制裁者達は圧倒的な敗北をし……  
帰路についた……

ニューデイズ

都市リノヨ 病院  
待合ホール

ファントムが現れ、ソファーに座っているバアルに近づく。

バア

「ファントム君……」

ファ

「兄貴は!？」

バア

「704号室だよ。

まだ……」

ファントムは最後まで聞かずにエレベーターに向かった。

バア

「……最後まで聞こつよ。

……

まあ……兄弟だからか……」

心配しなかったらおかしい……」

レディ

「私もお兄ちゃんが心配だよ」

売店で買い物をしていたレディが、バアルの元に戻る。  
隣に座ると、缶コーヒーを渡した。

レディ

「お兄ちゃんも銃創が多かったんだから……  
安静にしていな」と

バア

「まだ余裕さ。」

それよりも……」

レディ

「？」

(バア)

何故、幻視の巫女が？

それにシヌという奴……

僕やタイラーさん達が手を焼いた奴らを

4人も倒すとは……

何者なんだ……？

……  
ガーディアンズも関わった事だし……  
僕も動かないと……

ルシフェル病室  
704号室

病室の中には  
ヴィヴィアン  
タイラー  
リリス  
ロスト  
が居た。  
そしてもう1人……

ファ

「!?!?!?」

「何故シヌがいるんだ!?!」



シヌ

「じー

病院では静かに」

フア

「貴様！」

リリ

「待って下さい！」

シヌはルシフェルを助けてくれたんです！」

フア

「な！？」

意外な事実には驚愕する。

狂神の信念時のマガハラで同情したと言っても、シヌを信じているわけではない。

フア

「ロスト、本当か？」

ロス

「……………ああ。

間違いない」

シヌ

「残念だったな」

ファ

「チッ……」

何故生きている？」

シヌ

「まだ話す必要は無い。

今はルシフェルの近くにいたんだな」

シヌはファントムの横を通ると……

シヌ

「（後で屋上へ来い）」

そう言い残し、去ってしまった。

ファ

「……………」

兄貴はどんな状態だ？」

リリ

「……………」

タイ

「意識不明だ……………」

死にはしないが、当分は目覚めないだろう……………」

ヴィ

「手と足に重傷を負って……………」

血液量が足りてない状態なんです……………」

かなり元気が無い

ヴィヴィアン。

5年近くも相棒なのだから当然だろう。

ファ

「一体誰が……………」

マリ

「お兄さんは!?!」

船を停めに行っていた

マリが、病室に入ってきた。

ファントムを先に降ろし、自分は船を停めていたのだ。

リリ

「ルシフェルは大丈夫よ……  
大声出さなくても良いわ」

リリスは落ち着いている。

ルシフェルの心配はしているが、ヴィヴィアンとは少し違う見方なのだろう。

ヴィヴィアンは心配し過ぎ。

リリスは信頼し過ぎなのだろう。

ファ

「……………」

ファントムは場を見計らい、病室をあとにした。

病院 屋上

ファントムは屋上についた。  
シヌは手すりによしかかり、景色を眺めている。  
夕日が輝いていた。

シヌ

「君はタイラー君とヴィヴィアンちゃんに、俺の事を話したんだな。  
会った事は無いから  
初めましてだったけど」

ファ

「嫌な目で見られただろ？  
貴様のした事は全て話している」

シヌ

「嫌な目しかされなかった……  
どうやら俺の信念は、君しか知らないみたいだな。

……  
……同情は避ける。  
……  
これからの戦いは特にな」

ファ

「貴様に指図される覚えはない。  
それより、何故呼んだ？」

シヌ

「聞きたい事位あるだろう？」

君は主人公だ。

知っておく事はある」

少し前と何も変わっていない様に見える……

しかしファントムは、

違いを感じ取ったのか、信じる事にした。

ファ

「何故生きている？」

シヌ

「神だ。

奴が直接、俺に罰を与えた。

生き返って制裁者達を抹殺しろと」

ファ

「制裁者達？」

シヌ

「通称

t w e l v e p u n i s h e r  
カザリって奴はそのメンバー……  
簡単に言うとは

“転生者”だ」

ファ

「転生者？」

てか、そのメンバーって俺やエミリア達も……

シヌ

「それは自分で調べろ。

神はそう望んでいる。

……

言えるなら……

君やエミリアちゃん、ナギサちゃん、シズル君はまだ抹殺対象じゃないって事だ」

ファ

「話せる事と話せない事があるのかよ……  
制裁者達の目的は？」

シヌ

「人間への制裁。

俺と似た様な事をするつもりだ」

ファ

「……そりゃ凄い。

さっさと潰さない」と

シヌ

「言っておくが、奴らは1人1人が強い。  
一気に相手にしたとしても2人が限界。  
ルシフェルは4人相手であの様だ」

ファ

「大丈夫だ。

俺には……」

シヌ

「コクイントウで作った刀があるから余裕？  
だが体を酷く酷使用する」

ファ

「!?!? 何故知って……」

!?!」

シヌはファントムの額に触れた。

ファントムの脳に

星霊祭の記憶が流れ込む。

シヌ

「君はこの祭で刀を使った。

無かった事にされた後は1度も使っていない」

ファ



「ロストの話は本当だったな……」

シヌ

「……………」

制裁者達はまだ5人しか集まっていない。

君達を抜かして最大7人。

傷が癒えるまでは仲間探しはしないはずだ、いつでも戦える準備はしておくんだ」

ファントムを置いて、

屋上から立ち去ろうとする。

ファ

「どこへ行くんだ？」

シヌ

「俺と一緒に星れ……」

じゃなくて、ミレイが生き返った。

神は2人1組でいろって」

ファ

「なら亜空間能力を使えば良いだろ」

シヌ

「神が少し前の俺を

そのまま復活させると思うか？」

亜空間能力で使えるのは

- ・ 他人の治癒
- ・ 黒餓を取り出す時
- ・ Aフォトンを生み出す時

それと昔みたいに

Aフォトンは纏えない。

自分を亜空間で治せないからな。

不老不死も取り上げられた。

.....

使えると言ったら.....

- ・ 神病の身体能力の強化
- ・ Aフォトンを纏わず使用
- ・ 亜空間から黒餓を取り出す

今回は俺で倒せるLvだったか.....

君か“虚実”.....

どちらかが制裁者の戦力になれば.....

.....

俺達は負ける「

シヌは立ち去った。

ファ



手に持っている手紙を見る。

どうやら誰かに呼ばれたようだ。

？

「カレン……」

カレ

「！？」

誰もいないはずの後ろから声をかけられ、武器を構えて後ろを見た。

そこには白マントを着た人物がいた。

？

「わわわ！

待ってカレン！」

カレ

「……！」

その声……」

フードを脱ぐ。  
正体はミレイだった。

カレ

「ミレイ……」

ミレ

「久しぶりね……  
5年振りかし……  
……！」

何故生きているか？  
何故今になつて？

そんな事を一切聞かずに、ミレイに抱きつくカレン。

カレ

「会いたかった……  
本当に……  
会いたかった……」

ミレ

「カレン……」

……

……

すみませんカレン。

あまり長く一緒にはいられません……」

カレ

「……え……？」

ミレ

「私は死にましたが、  
ある理由で生き返りました」

カレ

「どういう事なんだ？」

シヌ

「ここに居たのか。」

ミレイ、神は離れるなって言っただろ」

いつの間にかシヌが居た。

ミレイを探していたようだ。

ミレ

「すみません」

シヌ

「いや、謝らなくて良い。  
気持ちが変わらないわけではない」

ミレ

「ありがとうございます」

カレ

「彼は？」

ミレ

「シヌです。」

「私達の助けになってくれます」

カレ

「シヌ……」

……………

「まさか、ファントムの言っていた……」

ムサシジサシを構える。

シヌ

「嫌だなあ全く」

シヌも臨戦体制を整える。

しかしミレイが割って入った。

ミレ

「シヌさん、弁解と言つのを知って下さい。

カレン、ファントムさんから聞いたシヌさんの印象は良いものではないと思います……

しかし、今は仲間です」

カレ

「……」

わかった……」

カレンがムサシジサシを仕舞うと、シヌも警戒を解いた。

ミレ

「いいですか？

詳しい事は話せませんが、私とシヌさんはある意思によって生き返りました。

……

目的は……

「グラールを守る為」



カレ  
「！」

ミレ

「グラールを守るには、私とシヌさんだけでは不可能なんです。  
……お願いします。  
力を貸して下さい」

カレ

「……………」

……………  
双子なのに水くさいな。  
協力するに決まってる。  
グラールの為でもあるしな」

ミレ

「カレン……………」

カレ

「で……………私はどうしたら良いんだ？」

ミレ

「はい。」

1週間後……………

ここオウトク山に事情を知った関係者が訪れます。  
私も顔を出します。

それまで私の事を話さないで待っていて下さい」

カレ

「それだけか？」

シヌ

「ガツカリか？」

アイツらと戦わないだけマシだと思っけど。

.....

俺は下の町に泊まっているぞ。

君達は、仲良く同じ部屋で寝たら良い。

ああ...それと、仲良い奴にも無闇にミレイの事は話すなよ」「

立ち去ろうとするが.....

カレ

「待ってくれ。」

今気を使ってくれたな？

なら私も気を使おう。

私がここに泊まれるように手配する」「

シヌ

「.....」

そうか、お言葉に甘えよう」「

カレンが手を差し出す。

シヌ  
「？」

カレ

「挨拶がまだだったな。  
カレン・ミクナだ」

シヌ

「知ってるけどな……  
……………」

握手をしない……

シヌ  
「ゼロ・ブラック・シヌだ。  
よろしく」

何故か握手せずに行ってしまった。

カレ  
「？」

ミレ

「ごめんなさい……シヌさんに悪気は無いんですが……」

……

私達に触れる事を怯えているです」

カレ

「??？」

ミレ

「私達のような、フォトンに敏感なヒトにわかってしまっんです。彼の心が……」

カレ

「心……?」

ミレ

「生き返った時に一度触れたのですが……」

……常人には耐えられない闇を感じました……

それを知られて、仲間が去っていくのが嫌なんでしょう……

……

……

彼にとって……

やっと出来た仲間なんです」

1章：1　く求めていたの

は仲間く（後書き）

シ又はまだ、人類滅亡を考えている節がありますが……

神の監視下なので、そんな事は出来ません。

若干諦めたのか、仲間を求める感じがあります。

く神の使者+

12人の制裁者メンバーく（前書き）

twelve punisherの紹介は、ネタバレが若干あります。

く神の使者+

12人の制裁者メンバーく

ゼロ・ブラック・シヌ

Lv250

性別・男性

年齢・18歳

種族・第1人類

身長・183cm

体重・69kg

タイプ・“絶望”

“嘘”

“狂気”

“信念”

“対価”

“闇”

髪・目立たないオールバ

ック、漆黑

服装・黒い服、黒いコー

ト

所属・神の使者

1年前に起こった、

狂神の信念の首謀者。

ファントムに倒され地獄へ落ちたが、神との交換条件により働いている。

交換条件の内容は……

天界に住まわせる代わりに、生き返って制裁者達を抹殺すること。

現在でも人類滅亡は諦めていないが、神の監視下にいる以上は出来ない。

しかしシヌの考え方が変わってきたのか、諦めかけている。その理由は仲間が一因と思われる。

仲間までいなくても、親近感がわいてきているようだ。

決定的なのはカレンと握手しなかった事だ。

ミレイもそうだが、

フォトンに対して敏感な人物だと、シヌに限って心が見えてしまっらしい。

自分の心知られて、離れていくのを避ける為に握手はしなかった。

現在はオウトク山のグール教団に部屋を持っている。

一緒に生き返った協力者のミレイは、基本的に一緒に行動しなければならぬ。

恐らくミレイに、シヌを近くで見張らせる為。

神によってシヌの力の半分は使えない。

使える能力は、

- ・ Aフォトンを纏わず使う
- ・ 亜空間能力による他人の治癒
- ・ 黒餓を取り出す
- ・ 神病の症状の身体能力強化

タイプは制裁者達の様な力は所持していないが、シヌを象徴する意味がある。

- ・ “絶望”



ミレイやカレンが感じ取るのはこの感情。

少し前は人間を絶望させるのを良しとしていたが、現在は自ら与える事は無い。

・ “嘘”

制裁者の“虚実”とは少し違う。

虚言癖は自重気味。

・ “狂気”

狂神の信念時に、人間の悪で人類を滅ぼそうとした。その悪が“狂気”。

・ “信念”

自分の悲劇を生み出さない為に、人類滅亡を“信念”にしている。

・ “対価”

シヌのお礼に関する。

永遠なる信念では明かされなかったが、制裁者達のある1人に関係がある。

・ “闇”

亜空間の歪みで生まれるAフォトンを示している。これは制裁者と似ている。

生き返った為、歳をとり始めている。

神が能力を半分封じているので、

LVが現実的に……

ミレイ・ミクナ

LV250

性別・女性

年齢・18歳

種族・ニューマン

タイプ・フォース

容姿・SEED事件時と同じ

所属・神の使者

5年前のSEED事件時に、  
誤って父親に殺害されている。

幻視の巫女であり、カレンとは双子。

死亡後は天界に送られ、神に星霊になってほしいと頼まれる。

グラール教団が出来た頃から星霊は存在しておらず、信仰によって  
生まれた神々（ヤオロズなど）を統括する為に星霊に任命された。

自分を神の1人としては見ておらず、あくまでもヒトして存在した  
いようだ。

しかし生き返った際に神の力が少し残っており、良くは思っていない。

LVは約250。

年齢は死亡時からになる。

シヌと一緒に生き返った理由は監視の他にも何かあるようだ。

現在はオウトク山のグラール教団で寝泊まりしている。

星霊という事は伏せている。

・神の使者

神が間接的に人類への干渉を行う為の存在。  
狂神の信念時のファントムも含まれる。

今回は、優秀な元人間を選抜している。

(シヌ、ミレイ)

目的は墮天使が構成した“12人の制裁者”  
(twelve punisher)  
の抹殺だが、  
そのメンバーである

ファントム

エミリア

ナギサ

シズル

は、今のところ抹殺対象ではないようだ。  
しかも、ファントムには協力をしてほしいらしい。

• t w e l v e p u n i s h e r

メンバー

“ 象徴 ” L V

名前

力の使用方向

“ 王権 ” L V ?

?

支配型

“ 運命 ” L V 2 0 0

ナギサ

運命型

“ 食 ” L V ?

?

攻撃型

“金” LV200  
ゴールド・シルバシノ  
支配型

“拒絶” LV200  
カザリ・イリオン  
拒絶型

“完全” LV?  
ファントム・レガス  
?

“愛” LV200  
エミリア・ミュラー  
支配型

“死” LV200  
シズル・シュウ  
運命型

“欲情” LV200  
シエリー・エクスタシー  
支配型

“戦争” L V 2 3 0

ロドリゴ・ゼル

攻撃型

“拷問” L V 2 0 0

アナ・ザ・ブラッド

召喚型

“虚実” L V ?

?

?

戦闘時にどんな戦い方をするかは、話の進行でわかります。

明確になっていないメンバーは、次の機会にします。

く神の使者+

12人の制裁者メンバーく（後書き）

ふと思ったのですが……

今現在、カレンとミレイは歳が違うけど……  
これを双子と呼んで良いのか……？

まあ、同じ時に生まれたんだから  
双子ですよね（笑）

歳どうこうの話じゃないですもんね。

今の何の話だったんだろう……

1章：2 〈嘘〃真実〉（前書き）

どっちかと言つと、

サブストーリーに近いかな？



## 1章：2 〈嘘〓真実〉

都市リンヨ

地下都市 カジノ

きらびやかに見える汚い裏カジノで、ルーレットにヒトが集まっていた。

青年が1つの番号だけに全チップを賭けたのだ。

換金したら1億メセタはくだらないだろう。

1チップ〓1万メセタ

と、高レート。

ルーレットにおいて、

1つの番号に賭けての配分は32倍。

勝った場合32億メセタと、普通のカジノでは破綻的金額だ。

しかしこの裏カジノでは、問題が無いようだ。

ディーラー

「よろしいですか？」

賭けた青年に問う。

青年

「問題ありません。  
早く回しましょう」

その肝が座った態度に、野次馬はざわつく。

ディーラーがルーレットを回す。

ボールが放たれ、だんだんと遅くなっていき……

……

……

……

見事に賭けた番号に当たった。

その瞬間に歓声が響いた。

ディーラーも驚きを隠せない。

……いや、違うところに驚いているようだ。

青年

「どうしました？」

もう一回賭ける前に換金してほしいんですが？」

実はこの青年……

1チップから始めて、連続で1つだけの番号を当てているのだ。

ディーラー

「わかりました……

すぐにご用意致します」

そう言うと、換金所の奥へ消えていった。

ディーラーが居なくなると、野次馬の1人が話しかけてきた。

野次馬

「アンタすげえな！

（なんだい、イカサマしてのかい？）」

耳打ちしてきたが、青年はハッキリと答えた。

青年

「イカサマ？」

……とんでもない。

むしろ、イカサマしてたのはディーラーですよ」

野次馬

「んな事はわかってる。

どうやっ……

青年

「全て“真実”

全て“嘘”

……わかるんですよ。

何となくね……

だからここで止めておくんです」

野次馬

「そうはいかねえ」

カチャ

青年は頭に銃を突きつけられた。

他の野次馬にも。

青年

「そういえば、お客さんの数が減りましたね。

貴方達が出ていかせたのですか？

ここを取り仕切るチユーザレファミリーですよ？」

チユ構成員

「頭が良いなあ。

俺達のイカサマが通じないわけだ。

……で？ どうやってイカサマしたんだ？」

青年

「言ったでしょう？」

何となくわかるって」

チユ構成員

「そうやってヒトは嘘をつく。

俺はそういうのが嫌いだね……」

青年

「その通り、“嘘”です。

しかし貴方に“人間”の何がわかるんです？

貴方も所詮“人間”という“ゴミ”でしょう？」

構成員がスタンモードをOFFにした。

チユ構成員

「10秒以内に答えろ。」

1……2……

青年

「だいたい貴方達の存在意義は何ですか？」

3……4……

青年

「結局愚かしい事をしただけで死ぬ存在」

5……6……

青年

「なら僕が存在意義を与えましょう」

7  
.....  
8  
.....

青年

「貴方達に存在意義は元々無い。

死ねよ.....

クソゴミクス野郎共」

9  
.....  
10  
.....  
！」

銃の引き金が引かれた。

しかし.....

鉛弾が発射されない。  
全員がだ。

チユ構成員

「!?!」

青年

「全員の銃に弾を入れ忘れた。  
それが“真実”です」

両手の袖から鉄扇を取り出して、構成員達の喉を斬った。

血飛沫を鉄扇で受け止める。

青年

「汚い血をかけないで下さい。  
どこまで行っても使えない存在だ」

シュッ!

と、血を飛ばし……



生き残りの構成員を探しに向かった。

警備室を制圧。

事務室を制圧。

個室を制圧。

最後に換金所へ行く。

扉を開けて、隠れているヒトを殺していく。  
容赦など全く無い。

ある程度始末し終わると、1人だけ生き残りを作る。

構成員

「ヒイ！ 助けて！」

青年

「うるさいですよ。」

「ここ、開けて下さい」

金庫の前に連れて行って開けさせた。  
中には大量の現金があった。

青年

「32億メセタ。  
早めに」

構成員

「は……はい……」

アタッシュケース32個にメセタを詰め終わる。

青年

「長かったですね。  
でも助かりました。」

t w e l v e p u n i s h e r には資金が必要なんで……

……

“お礼”として、半分は貴方にあげます。  
16個でも重いんですけど」

ケースの大半をトランサーに仕舞い、残りはキャスターを使って運ぶ青年。

ヒトを殺した事を何とも思っていない……

それほど……

すがすがしい顔だった。

）

ハル

「ハ〜イ!

グラールチャンネル5。

ニュースキャスターのハルです!

今日のニュースを

ピ〜クアップ!」

ハル

「ニューデイズ

都市リンヨで昨夜発生した、裏カジノ襲撃事件。

その新情報が入りました。

生存者のチューザレファミリーの構成員に事情聴取していたところ

……

構成員の方は支離滅裂な事を口走りながら、舌を噛み切ったとの事です。

一命は取り止めたものの精神に異常があるとの事で、今日未明に精神病院に移送された模様です。

手がかりが生存者だけだったとあって、1からやり直しになりそうです。

……尚、裏カジノを経営していたチューザレファミリーのボス……

キログマ・チューザレは、監視カメラの映像の公開を頑なに拒んでおり、ガーディアンズは情報公開を申し込み中との事です。

また、カジノから消えた総額16億メセタの行方と同時に、カジノ自体に異常な違法性があったとして、証拠が集まり次第に強制捜査を始めるとの事です。

この事件に対して、早くも懸賞金をかけるとの事です。

有力な情報がある方はガーディアンズにご一報下さい」

楕円形のテーブルに座っている制裁者達。

カザリは片腕が無くなっており、アンナは頭と首に包帯を巻いている。

中央の3Dテレビで流れているニュースを見終わると、電源を消した。

カザ

「チューザレファミリーの口止めも危ういですね。強制捜査なんて……」

ゴー

「私が金を払ったんだ。

……それと、心配は要らない。

既に証拠の監視カメラの映像は引き取った」

ロド

「“コミ”の中でも

“コミ”な輩じゃ……

口止めで400万。

映像はどれ位じゃ？」

ゴールドは手の指を10本立てた。

シエリー

「10メセタ？」

アンナがプラカードを出す。  
喋れないからだ。

(アン)

そんなわけないでしょ。

1000万メセタよ。

頭使いなさい、

やり ん野郎。

シエリー

「1000万!？」

大層な額だね」

カザ

「良いんじゃないの？」

16億になって返ってくる」

ロド

「それはどうかの……」

“虚実”の事じゃ。

我々 twelve punisherの中でもひねくれ者……  
うやむやにするかもしれんぞ？

………

それに……

元はシヌの仲間じゃ。

最後に我々についたが、逆も無いわけでは無い」

カザ

「………」

ともあれ。

こっちの仲間になれば戦力になるし、“食”も復活できる、僕ちん  
やアンナさんの怪我也治せるでしょう。

………

早く見つけよう」

いつになく真剣な顔をするカザリ。

他の4人も真剣な顔し、  
イスから立ち上がった。

1章：2 〈嘘〃真実〉（後書き）

青年

LV？

性別・男性

年齢・20歳

種族・ヒューマン

身長・178cm

体重・66kg

タイプ・“虚実”

運命型

召喚型

髪・後ろのトゲトゲが

目立ちにくい髪型

灰色

服装・イロハフブキ、黒

所属・twelve punisher

“虚実”を象徴する青年。

ヒトを殺す事に容赦無用かつ、何とも思わない。

カジノで手に入れた大金は、制裁者達の為に使うつもりのような。  
しかし元はシヌの仲間だったようで、ひねくれ者のようだ。

“虚実”の力は、



制裁者達の中でも異質でありファントム（制裁者）と同等に近い。  
“虚実”は嘘だけではなく、真実までも司る。

・運命型

事実を根本的にねじ曲げれる。

構成員の銃は元から鉛玉が入っていたが、入れ忘れたという  
真実を作った。

しかし制限が存在している。

目に見えていない場所でもしか影響を及ぼせない。

他の存在に影響を及ぼせない。

・召喚型

嘘を作り出す能力。

非常に強力な能力ではあるが、制限がある。

他の存在に影響を与えられない。

元々存在しないもの

（天界と地獄の存在も含まれる）

は作り出せない。

武器として使う鉄扇は、愛用品。

彼岸島っぽい？

若干意識してます。

雅好きです。

1章：終　　く招待状　　く（前書き）

後日談って雰囲気です。

セリフ多め。

1章：終　　く招待状　　く

ケイリヨン刑務所襲撃事件から4日後……

クラッド6

リトルウィング

居住区　ファントム自室

グラールチャンネル5の  
裏カジノ襲撃事件を見終わると、俺はテレビの電源を消した。

ファ

「昨日の事件か……

……

ハア……

嫌な事思い出した……」

実は昨日……

マリと酷い喧嘩をしてしまった。



リトルウィング  
カフェ

姉弟揃ったミカとワイナルが、仕事の話をしながら優雅に紅茶を飲んでいる。  
いつもの服装だ。

ミカ

「この前の研究は進みました？」

ワイ

「うん……これが難しくくてね  
……シズル君がガーディアンズから貰ったシールドライン……  
あれ作ったりゼンって言うヒトは、刑務所に入ってるから進まない  
んだよね」

ミカ

「では、私の課題が終わり次第に手伝いましょう」

ワイ

「ありがとう。」

姉さんがいれば百人力だよ」

シヌ  
「姉弟で午後のティータイム。  
幸せそうだな」

ミカ「!?!」  
ワイ「!?!」

気配を消して、シヌが近くに座っていた。

ミカ  
「シヌ!?!」  
何故……!?!」

シヌ  
「そんな事は別に良い」

ワイ  
「君は死んだと……」

シヌ  
「死んだ。  
……だから?  
些細な事だ。」

……

俺がここに居られるのには制限時間がある。  
話を済ませよう」

ワイ

「君の話？」

聞きたくないね」

シヌ

「面倒くさいな……」

じゃあ一方的に話す。

3日後にオウトク山に来てくれ。  
君達がグラールを救いたいなら」

背中を向けて歩き出す。

ミカ

「どつという事です？」

ワイ

「僕が思うに、君がグラールを滅ぼしそうなんだけど」

シヌは背中をみせながら……

シヌ

「聞く気はあるか？」

と聞いた。

ワイ

「……ある」

ミカ

「正直、心を許せませんが……  
グラールに関してなら……」

シヌ

「そう言ってくれと思った」

都市リンヨ

ルシフェルが入院している病院



病室内ではリリス、ヴィヴィアン、マリが居た。  
ルシフェルはまだ意識不明だ。

マリは頭を壁に押し付けながら、頂垂れている。

マリ

「ハア」……」

ファントムと同じ様なため息だ。

リリ

「早く仲直りすれば良いじゃない」

マリ

「仲直りしたいけど……」

リリスさんはムカつきませんか？」

リリ

「副隊長だけじゃないわよ」

マリ

「？」

リリ

「ヴィヴィアンさんにロストさんを観察してもらったら……」

ヴィ

「恐らく何か知っている雰囲気です。」

ルシフェルさんも、少し前と変わったところがあります」

マリ

「……男って……」

Gコロニー

ガーディアンズ

総裁室

総裁室にバルとライア総裁、カーツ司令官、タイラーが集まっていた。

バア  
「全員に届きましたか」

バアル達が手紙を、目の前に掲げる。

ライ

「オウトク山……」

しかもこの面子……」

カー

「昔みたいだな」

タイ

「5年前か……」

懐かしいものだ」

バア

「……しかも送り手が、ミレイ・ミクナ。  
ただ事じゃないですね」

手紙を仕舞う。

バア

「納得できる話を期待しましょう」

1章：終　　く招待状　　く（後書き）

なんか、

中途半端な感じですみません。

## 2章：0 ～ペテン師～

ニューデイズ  
オウトク山  
グラール教団

この日……

ミレイとシヌによって集められたヒト達は、会議室に集められていた。

マリ  
リリス  
ロスト  
ヴィヴィアン  
バアル  
カレン  
ライア  
カーツ  
タイラー  
ミカ  
ワイナル

何故かミカとワイナルがいる……  
そしてファントムは別室……

## 会議室

円形のテーブルに座敷式と日本的雰囲気であり、会議室とは少し違う感じがした。

ミカとワイナールに会った事のないヒトが集まって、珍しいものを見る目で話している。

バア

「ルシフェルから話は聞いてます。僕はバアル・セレンサーです」

ライ

「ミカが亜空間事件を……  
ワイナールが欠片事件を解決したんだっただな？」

ヴィ

「凄いですよね！  
お会いできて嬉しいです」

タイ

「ヴィヴィアンもそれと同等の事をしただろう」

かつて起こった事件の解決者であり、現代に生き返った存在……  
それで称えられた事は無いので、おどおどしてしまふ。

カレ

「……………」

カレ

「君は何か知っているようだな」

カレ

「何の話だ？」

カレ

「落ち着き過ぎだ。」

君の双子の妹からの手紙だ。

3日前に届いて知っていたとしても、落ち着いていられないはずだ。

3日前よりも前会っていたのが自然な考え方になる」

カレ

「……………」

まあそれは、皆気づいているだろうな。

……………

…………… 1週間前から会っている。



未だに詳しい話は聞いていないがな……」

ミレイ

「皆さん、お待たせしました」

襖を開け、ミレイが姿を現した。

会議室とは違う部屋

部屋にあるモニターが会議室を映している。

シヌ

「同じで見ついでくれ」

そう言い残して出ていったシヌ。  
ファントムは不審に思ったが、昔とは違うのはわかっているので、指示に従う事にした。

ファ

「何で俺だけ……」

不服に思いながらも、  
会議室の様子を見始めた。

会議室

ミレイも姿を現したが、シヌも後ろに付いていた。

マリ

「…………シヌ…………」

ライ

「アイツがシヌ？」

「まだ子供じゃないか」

カー

「あんな子供が人類滅亡を企てるとは…………」

シヌ

「やあやあ！」

俺にアツサリと仮死状態にされたグラールの代表達。

さっさと修行編でもやって強くなったらど…………痛…………！」

シヌの足を思いっきり踏むミレイ。

ミレイ

「少し黙ってて下さい…………！」

シヌ

「わかりました…………」

座布団に座り、揃ったヒトを確認する。

ミレ

「揃いましたね。  
ではまず……」

マリ

「あの……！」

話を始める前にマリが声をかけた。

マリ

「ファントムは……  
来ないんですか？」

心配している声だ。

(ファ)

「やっぱり可愛いな……」

ミレ

「彼は私の命で動いています。  
彼に話はしてあるのでご心配なく」

マリ

「そう…ですか……」

(ファ)

「ミレイ君、嘘をつくなよ」

ミレ

「話を戻しますね。」

……

「単刀直入に言います。  
今グラールに……  
危機が迫っています」

(ファ)

「いきなりRPGになったな……  
いや、ロケットランチャーの方じゃなくて」

ミレ

「私はシ又さんの力によって生き返りました。彼に聞いてわかったのですが、彼は1年前の事件で何とか生き残りグラールに戻ったそうです……ファントムさんに見つかからないように過ごしていたところ、グラールを滅ぼそうとする組織を発見し、壊滅の為に私を生き返らせました」

カー

「わからんな。」

シ又と言う男はグラールを滅ぼそうしたんじゃないのか？」

シ又

「俺以外にやらせるわけないだろ。」

考えるポンコツロボ

……痛！」

右斜めにいたシ又に、  
座布団を飛ばす。

ミレ

「その組織の正体……」

……それは旧文明人。  
旧文明人の意識をその場で引き剥がすには、私の力が効果的だそうです。

……彼らの目的は旧文明の復活。

2年前に、カムハーンと言う人物がしようとした事を行う気です。私はそれを許すわけにはいきません。貴方達もそのはずです」

タイ

「愚問だな。

ここに居る全員が許さない」

ミレ

「はい……」

そこで、旧文明回帰を阻止する為に組織を探してほしいのです」

ライ

「なるほど。

アタシ達位の地位なら、探すのは効率的だな」

ミレ

「それだけでは有りません。

組織の人員の中には私達に関わった人物もいるのです」

カー

「もしや、

ロドリゴ・ゼル大佐と

シエリー・エクスタシー少尉も？」

ライ

「誰だい？」

カー

「同盟軍に所属している兵士なんだが、少し前から連絡が取れない

んだ」

タイ

「ローグスにも1人いる。

資金援助をしてくれていた

ゴールド・シルバシノ

彼も数週間前から行方不明……

というか、ケイリヨンの森で見たぞ」

ライ

「私は……

……

そういえば、ガーディアンズから推薦されていた学生がいたな……

名前は

カザリ・イリオン

だったな」

ミレ

「皆さん心当たりがありますが、他にも関わった人物がいます。

彼らを救う為にも力を貸して下さい」

全員が頷く。

誰も否定していない。

ミレ

「ありがとうございます。」



組織の詳細はシ又さんがお教えします。  
すみませんが、私はこれで……」

座布団から立ち上がり、会議室を後にした。

別室

モニターを見ている  
ファントム。

ファ

「旧文明人……？」

その組織のメンバーに乗り移っている……

エミリア達はまだ大丈夫なのか？

……

待てよ、俺はどうなる？

俺は旧文明人だろ」

ミレ

「お待たせしました」

後ろの襖から、ミレイが出てきた。

## 会議室

話し手が変わり、シヌが組織について話す。

シヌ

「てことで、俺から説明させてもらう。

組織の名は

e i g h t    p u n i s h e r

8人の制裁者だ。

その名通り8人で構成されあり1人1人がLv200、またはそれ以上。

バアル君とタイラー君が戦ったのはLv230のロドリゴだ。

個人的に戦っても死ぬだけだから、見つけたらミレイか俺に連絡しろ」

リリ

「シヌ、彼らが旧文明人なら貴方は知っているでしょう？」

ロス

「俺達は聞いた事が無いぞ」

シヌ

「公にはされていないカムハーンの部下だ。

俺よりかはミカとワイナルの方が知っている。

俺はカムハーンの政治や組織体制には口出ししなかったからな」

ミカ

「乗り移っている旧文明人は、その体の人物と同じ名前をしていますが……」

ワイ

「彼らってカムハーンに忠誠を誓っていたから、カムハーンと同じ事をして不思議じゃないね」

カレ

「……………」

ヴィ

「……………」

シヌ

「まあ、束になって戦えば倒せるかもな。  
話せる相手がいるなら話して、協力してもらえ。

……………あとは……………」

メンバーの名前か？

メモしろよ。

カザリ・イリオン

ゴールド・シルバシノ

シェリー・エクスタシー

アンナ、本名不詳だ。

胃呪魔・豪飢

(イズマ・ゴウキ)

アルベルト・キツシャー

リゼン・シュレイド」

バア

「！！ リゼン！？

アイツもなのか！？」

シヌ

「まだ乗っ取られていなかったから、  
戦力確保の為にケイリオン刑務所に入っていたリゼンを、奴らは拉  
致しようと考えた。」

もつとも、君達が囚人を移動させたお陰で何ともなかったがな」

立ち上がるシヌ。

シヌ

「怪我したら俺が治してやる。

今日は深入りせずこれで解散。

気が向いた時で良いから、手伝ってくれ……

じゃあな」

ミレイと同じ様に会議室を出ていった。

別室

ファントムとミレイが居る別室に、シヌも到着する。

ファ

「……………あの話……………」

シヌ

「気づいたか？」

全部、嘘だ」

ミレ

「無闇に神の事は話せません。

この次元のバランスが崩れて、元々無かった事になります。

カレンには神ではなく、星霊によって生き返ったと言いました。

カレンの雰囲気<sup>が</sup>ヴィヴィアンさんに疑われた感じがありますが、問題無いでしょう」

ファ

「……………」

本当は俺とエミリア達合わせて12人だな？

奴らの正体は何なんだ？」

シヌ

「行っただろ。

それは自分で知るんだ」

ファ

「何故？」

シヌ

「知るか。  
神がそうしろって言ってんだ」

ファ

「……………」

……………旧文明人じゃないとしたら………  
ミカとワイナルに嘘を言わせてるな？」

ミレ

「ええ、私がシ又さんに許可を出しました。  
信憑性が増したでしょう？」

ファントムは呆れ顔をして、壁に寄りかかる。

ファ

「……………とんだペテン師達だな」

ミレ

「……………どつ思おつと構いませんが、これは貴方の性格を考慮しているんです」

ファ

「……………どつという意味だ？」

シ又

「……………仲間思いつてのは……………」

いつか何かを犠牲にしないといけない。  
君の場合は……心だな」

ファ

「心……？」

シヌ

「いつかわかる。」

その時には

t w e l v e p u n i s h e r の正体がかかっていると思う……

……

話す事は話した。

マリちゃんと仲直りしてこい」

ファ

「何で知ってるんだよ」

しかし仲直りしたいのは山々なので、部屋を後にした。

シヌ

「……………」

ミレ

「今になって仲間を求めれば、貴方は犠牲を払う事になりますよ」

シヌ



「……………」  
「ああ、そうだな」

ファントム同様、シヌも部屋を後にした。

## 2章：0 ～ペテン師～（後書き）

twelve punisherの全員の名前がやっと判明しましたが、読みづらくてすみません。

リゼン・シュレイド

胃不魔・豪飢

アルベルト・キツシャー

は別項で紹介します。

「王権、食、虚実」

「ユーザーズ（前書き）」

“王権”追加

“食”追加

“虚実”更新

「ユーザーズ」追加

何のインフォメーション？

く王権、食、虚実

チユーザレク

リゼン・シュレイド

Lv210

性別・男性

年齢・20歳

種族・ニューマン

身長・173cm

体重・55kg

タイプ・“王権”

支配型

髪・7：3分け、青

服装・燕尾服

所属・twelve punisher?

何百年も昔に起こった

4種族の大戦争を終結させたデイグニテイ家の末裔。

バアルの親戚であり、デイグニテイ家の先代はレディである。

デイグニテイ家に仕えていた頃……

狂神の信念時の惨劇に異常な恐怖を覚え、第2の狂神の信念を阻止する為に、デイグニテイ家の当主になってグラールを統治しようと企てる。

しかし誤算が重なったせいか計画は頓挫。

テロリスト犯として

ケイリヨン刑務所に服役していた。

居場所を掴んだ

t w e l v e p u n i s h e r は刑務所を襲撃するも既に囚人は移動されており、現在は別の刑務所に服役している。

現在、t w e l v e p u n i s h e r に対して仲間意識は無い。

胃不魔・豪飢

(イズマ・ゴウキ)

L v 2 0 0

性別・男性

年齢・31歳

種族・ビースト

身長・223cm

体重・209kg

タイプ・“食”

攻撃型

髪・セミロング、緑

服装・橙ジャージ

赤パーカー

所属・t w e l v e p u n i s h e r ?

タイプは“食”だが、

別に太っているわけではない。  
逆にムキムキだ。

異常にカロリーを消費する為か、行動後は何かを“食”さなければ  
ならない。  
人間的な食べ者を摂取しないと、ヒトから建物まで何でも“食”し  
てしまう。

実は、狂神の信念時にクリンサ街で暴れていたOFMの正体である。  
その為、死亡している。

アルベルト・キツシャー  
Lv250

性別・男性  
年齢・20歳  
種族・ヒューマン  
身長・178cm  
体重・66kg  
タイプ・“虚実”

運命型  
召喚型

髪・後ろのトゲトゲが      目立ちにくい髪型      灰色  
服装・イロハフブキ、黒  
所属・twelve punisher?

twelve punisher内でもかなりの実力者。かつ、メ  
ンバーから変わり者呼ばわりされている。

制裁者の中でも強力な力、“虚実”を司っている。

(能力については1章：2の後書きに記述)

都市リノヨにある裏カジノを壊滅させた人物であり、それに伴った  
ヒト殺しを何とも思っていない。

怒りでもなく、快樂でもなく……

何も感じない。

……

例えるなら、人間が息するのと同じ。

日本的な文化を好んでいるのか、

服にイロハフブキ、

武器に鉄扇を使用する。

その為かはわからないが、日本刀を使うファントム(制裁者)とは  
仲が良い。

元々twelve punisher達の仲間ではなく、シヌと知  
り合いだったようだが……？

キログマ・チューザレ

性別・男性

年齢・49歳

種族・ビースト

身長・191cm

体重・80kg

髪・後ろに束ねている

茶色

服装・特注のタキシード

白

所属・チューザレ

ファミリ

ニューデイズの

都市リンヨに根付くマフィアのボス。

地下で裏カジノを運営していたが、アルベルトによって破壊されファミリの2/3が機能していない。

壊滅後……

ガードイアンズにカジノの違法性を追求され、大人しくしている。

ゴールドに買収されており、口止めに400万、監視カメラの映像に1000万を貰っている。

しかしながら罪悪感を感じており、早急に犯人を見つけて舎弟の為に報復したいようだ。



く王権、食、虚実

チューザレク（後書き）

“虚実”の能力で  
楽しんですみません。

2章：1 く仲直りく（前書き）

自分の変態性が物凄く  
出ています。

## 2章：1 ～仲直り～

オウトク山での会議よりも、1日前……

パルム  
クリンサ街跡地

狂神の信念時に、惨劇の舞台になった街。  
今となつては誰も住んでおらず、血の跡や壊れた建物しか残っていない……

そんなゴーストタウンを誰か歩いている。

アル

「重いですね……」

リアカーにアタッシュケースを乗せて引っ張っている、“虚実”のアルベルトだ。

アル

「……………」

「……………」  
「……………」

やがて、旧倉庫地区のある場所で止まった。  
焼けて黒くなっている地面がある。

アル

「嘘」として。

胃不魔・ゴウキさん……………」

「貴方はここでファントムさんに倒された」

「そう口に出す……………」

すると、黒い焼け跡が無くなっていき……………」  
身長2mを越す大男が突如現れた。

「彼が胃不魔・ゴウキ。」

ゴウ

「……………」  
「ゲホ！　ゲホ！」

……？……  
……「ゴウキは……」

アル

「おはようございます。  
つと言っても今、夜ですけど」

ゴウ

「……誰だお前？」

アル

「今のゴウキさんが知らなくて当然ですね」

アルベルトはゴウキの首に手刀を食らわし、気絶させた。

アル

「皆さんと会えば……  
自分が何なのかがわかりますよ」

リアカーのアタッシュケースの上に乘せると、また歩き出した。

現在

ニューデイズ

オウトク山

グラール教団

会議が終了して各々解散する……

……が……？

ヴィ

「皆さんは……」

変だと思いませんでしたか？」

ヴィヴィアンが、解散しようとするヒト達に問いかける。

ライ

「？ ……何が？」

ヴィ

「カレンさん、

妙に落ち着いていたし……

……話が……強引じゃないですか？」

募っていた疑問を口に出してしまう。

カレ

「別に…私は……」

リリ

「珍しいわね、ヴィヴィアン。

そんなに強引だった？」

タイ

「そうだな。

強引過ぎるわけでもない。

証言者もいる」

証言者とはミカとワイナルの事だ。

ライ

「まあ裏に何か有るつと無かるつと、グラールの為なら構わないぞ。  
……そうだろ？」

ヴィ

「  
……  
そうですね……

……  
ごめんなさい……」

すぐに立ち上がって、  
最初に出ていってしまった。

マリ

「  
……  
ファントム来てないかな？」

マリも立ち上がって、  
出ていった。

バア

「僕はリゼンに会いに行こうかな」



ライ

「まだ仕事が残ってるだろ」

バア

「そうでしたっけ？」

ライアとバアルが出ていく。

カー

「では私も帰還するとしよう」

カーツも出ていく。

タイ

「私は船に戻っている。」

マリがついてくるかどうか聞いていてくれ」

リリスとロストに言い残し、船に戻ってしまった。

カレン、リリス、ロスト、ミカ、ワイナールが残る……

ロス

「ま、ヴィヴィアンが言った事は間違っではない」

突然ロストが喋り出した。

リリ

「どういう意味ですか？」

ロス

「……俺もカレンが何かを隠してるって事はわかる。会議が始まる前から薄々感じていたんじゃないか？」

リリ

「……………」

カレ

「……………」

……………私は……………

ロス

「まあ、カレンが何を隠そうと知ったこっちゃない。  
総裁の言った通り、グラールを救う為なら嘘や隠し事1つや2つ、  
どうって事ない。」

……  
……問題はミカとワイナルだ」

ミカ「……!!」  
ワイ「……!!」

ロス  
「リリースも気づいてるだろ。」

シヌに聞かされた部下は、太陽王の組織に存在しない」

カレ  
「何……?」

ロス  
「そこまでは聞かされていないのか……」

リリ  
「私達の組織は、太陽王の組織を調べ尽くしましたからね。」

……  
……実際、どうなんです?」

ミカとワイナルに問いかけた。

ミカ「……………」

ワイ「……………」

白状しない2人……

リリ

「黙っているという事は……

嘘を言った……

……………いや、嘘を言われたという事ですね？」

シヌ

「そこまでだ」

まるで見計らったかのように会議室へ入ってきた。

シヌ

「ロスト君リリスちゃん、勘が良すぎる。」

細かい事は気にするな」

一瞬にしてロストとワイナールの額に触れる。

すると意識を失って倒れてしまった。

カレ

「!?!? 何をした?」

シヌ

「あらかじめ用意していた記憶を流し込んだ。起きた頃には疑問は無くなっている。

……カレンちゃんも……

いじくられなくなかったら深追いはするな。

星霊は少し強引でも

グラールを救いたいんだ……

……

さあ、ミカ達は仕事の時間じゃないか?  
会社に遅刻するぞ」

ミカ

「シヌ……」

ワイ

「僕達が真相を知る時は来るのか?」

シヌ

「……………」

来ない……………」

来た場合、グラールはバランスが崩れて滅びる。

……………」

……………」それを阻止する為にファントム君はいる。

彼が全てを知って引き受ける。

……………」

神頼みならぬ、人間頼みだな」

教団内廊下

トボトボと歩いている  
ヴィヴィアン。

後ろからマリが追いかけてくる。

マリ

「意気消沈って感じだね？」

ヴィ

「マリさん……」

私……

自分の事が許せません……

あんな風にヒトを疑って……

グラールを救う為ならって答えも出てたのに……」

マリ

「仕方がないよ……」

誰だって他人を疑うし、答えを見落としてる時だってある……

……  
って言っても、

ヴィヴィアンの疑問は間違ってるないよ」

ヴィ

「？」

マリ

「カレンさんが何か隠してるのは明白。

ミカさんとワイナルさんも嘘言ってる。

……それに……

ファントムもお兄さんもロストさんも、何か黙っている。

……

男ってのはどうしてそうかな……

たぶんファントム達はその中でも特殊だろうけど」

ヴィ

「男のヒトって、そういうものなんですか？」

マリ

「良いとこ見せたいんだよ。」

ファントムは仲間思い過ぎだからだけと」

ヴィ

「なるほど……」

まだ勉強不足ですね私……」

ヴィヴィアンが微笑んだ。

マリもつられるように微笑んだ。

それを廊下の曲がり角で聞いているファントム。

ファ

「……………」



(ファ)

おかしいな……

マリの読心術が明確なものじゃない。

これまでは読み取った事全てを言い当てたのに……

……

もしかして神関連の事は読み取れないのか？

俺が初めて神と遭遇した後も聞かなかった……

ファ

「……まあ良いか……」

ヴィ

「何だか落ち着きました。

ありがとうございます……！」

……そういえば、この後どうするんですか？」

マリ

「ファントムを見つけて謝らせる。

アタシの気分が良かったら、隠し事も聞かないであげようかな……」

ファ

「何だよそれ……」

ヴィ

「では、リリスさんとロストさんと一緒に帰りますね」

マリ

「うん。じゃあね」

ヴィヴィアンに手を振るマリ。  
ヴィヴィアンは走りながら手を振り返した。

マリ

「ふう……」

早くファントムを探そう」

ファ

「……俺はここだぞ」

後ろから声が聞こえて、ビックリするマリ。

マリ

「ほわぁ!!..!

..... ってファントムかい!」

ファ

「元気だな」

マリ

「うるさい。」

.....

もしかして聞いてた?」

ファ

「ん〜、まあな」

マリ

「じゃあわかるわよね?」

手を広げるマリ。

マリ

「自分が悪いと思ってるなら抱きついて」

ファ

「え……？」

君にも落ち度が……

マリ

「何か言った？」

ファ

「いえ、何でもないです」

自分よりも10cm以上も背の小さいマリを抱き寄せる。

マリはファントムの背中に手を回し、頭を胸に当てた。

ファ

「やっぱりマリは可愛いな……」

マリ

「それで許してもらったつもり？」

……次は……」

胸から頭を離し、フロントムの顔を見る。  
ほんの少し口をすばめる。

ファ

「わがままな子だな」

マリの頬に手を当てて、濃厚なキスをする。

マリは満足そうな顔する。

同時に頬がピンク色になっていき、恍惚な笑みを浮かべる。  
少しすると顔を離した。

マリ

「正解。」

望み通りにしてくれてる」

だんだんとマリの体が火照っていく。

マリ

「ハア……ハア……」

もう3日もしてないよう……

ファントムにはムカついていたけど、すごくしたかったんだよう?」

息が荒くなり、甘い声を出す。

マリ

「我慢出来なくて自分で慰めたけど……

全然満たされなくてえ……

やっぱりファントムじゃないとムリィ……

……

お願いファントム……

してえ……」

その場で上着を脱ぎ始める……  
しかしファントムが止める。

ファ

「帰ってじっくりすれば良い」

マリ

「ふえ〜ん……

意地悪う……」

涙目になるマリだったが、ファントムに手を差し出されて繋いだ。

ファ

「帰るっ」

マリ

「うん……！」

マリは目の涙を拭いた。

## 2章：1 ～仲直り～（後書き）

カレンは、星霊がミレイを生き返らせたと思っています。

ミカとワイナルは、星霊ではないと思っています。

ロストとリリスは、意識を取り戻した後に何故か納得しています。

何故ファントムだけに秘密を言うのか？

世界のバランスがおかしくなるから、必要最低限のヒトにしか言えないのはありますが、

秘密を知ったら、仲間はファントムを戦わせまいとするでしょう。



2章：2　く血の悪夢く（前書き）

果たして、この夢は何なのか！？

2章：2 く血の悪夢く

ベチャ……ベチャ……

真っ赤な血がリトルウィングのロビーに張っている。

ベチャ……ベチャ……

血だけではない、ヒトのと思われる肉片や内臓が散らばっている。

ベチャ……ベチャ……

血の上を歩く少年。

血に映った少年の顔……

頬に血をベツトリとつけている……  
ファントムだった。

無表情

その言葉に尽きる顔だ。

持っているサンゲは真っ赤に染まり、鈍い光を放っている。

ベチャ……ベチャ……

……

……

事務所の前で止まる。

そこには、

腕と足と胴体と……

頭は無かった……

しかし、それらしき肉片がある……

ナギサよりかは短い黒髪をしている。

胴体に纏っている服……

それは元々ファントムの私服だった服……  
赤いブレイブスコート。

そう……  
この遺体はマリだ。

ファ  
「……マリ……？」

……  
誰……が……

……  
……俺？……  
俺が殺した？

……  
……そんな……バカな……」

ガシッ！

マリの腕がファントムの腕を掴む。

ファ

「！！！！」

足もファントムの足に絡む。

バシヤア！

腕と足に転ばされる。

赤原礼装の黒い部分が赤くなっていく。

同時に胴体が近づいてきて、ファントムの胸に乗る。



目の前が真っ赤に染まった……

クラッド6

リトルウィング

居住区 ファントム自室

ファ

っは！！

……ハア……ハア……

ハア……ハア……



夢……か……

「……………」

隣で寝ているマリを見る。  
熟睡している。

帰ってから休み無しでして、マリが失神するまでしていた。  
服を着る気力も無い程疲れていたので、2人共裸だ。

ファ

「……………」

マリにかかっている布団を捲る……

可愛い寝顔に綺麗な肌、豊満な胸……

夢で見た状態ではない事に、ファントムは安堵する。

ファ

「……何て夢を見てんだ……俺は……」

時間を確認すると、  
まだ朝の4時だった。

ファ

「……」  
すっかり目が覚めたな……」

ベッドから降りて、落ちているトランクスを履いた。  
次にフロンティアウイングのスボンを履いた。

冷蔵庫まで行き、甘いオレンジジュースを取り出して飲む。

ファ

「何だったんだ……」  
あの夢……」

残ったジュースを冷蔵庫に仕舞う。

マリ

「ファントムウ」

どこ〜?」

マリの甘い声が聞こえてくる。

どうやらまだ満たされていないようだ。

ファ

「3日我慢しただけで凄い反動だな……」

先ほど見た見た夢を頭から消し、ベッドに向かった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5272y/>

---

ファンタシースターポータル2 偽神達の転生（日常編続き）

2011年11月30日23時50分発行